

新しい文化政策プロジェクト
2021年勉強会シリーズ 第1回
ショートレポート

2021年3月4日（木）19時～22時／Zoomにて

参加者 ゲスト2名、一般申込み9名、メンバー7名、学生2名

去る1月9日に、オンライン開催となった二度目の公開フォーラムを終え、プロジェクトのフェーズを「第二段階」に移行させる目的をもって、新たな勉強会シリーズを開始した。昨年中は、主にメンバー間でいわば助走的な議論を重ねてきたが、ここからはメンバーのみでは届かないさらに多彩な領域からゲストをお迎えし、学ばせていただきながら、文化政策の外縁をいよいよ広げてきたいと考えている。そしてむしろ、お迎えするゲストご自身や、お申し込みのうえ出席してくださる方々にも、そうした「大きな文化政策」の模索に参画していただくのが目的である。

今回は、とくに1月のフォーラムからの連続的な展開を重視し、フォーラムに参加して討論時間に重要な意見を述べてくださったお二方に、ゲスト報告をお願いした。

大島光春さんは、「文化財」として法的に保護の対象となるもの（土器など）と、ご自身が提唱される用語で「自然史財」と称すべきもの（化石など）の扱いの差異——後者については劣化や破却を止める方法もないこと——について、自然科学系の学芸員としての現場のご経験に基づき、わかりやすく説明してくださった。日本で明治初年以來、高度に発達を遂げてきた「文化財」保護の制度は、人間の手がかかわり、生み出したものを歴史の証徴として残し、後世に伝える発想の集約と言えるだろう。が、そこにあらかじめ内包された、残すべきものを人為的に選択し、ひいては歴史を選択的に構築するという機能について、これまで自分で考えてきたよりも、はるかに広い観点から顧みる機会をいただいた。

大島さんのご報告はさらに広範にわたり、ご勤務先でのお仕事のほか、地元自治体の生涯教育に関するボランティア活動その他、並行して関与されているいくつものお立場によって、「文化」と称されるものの意味が異なるという実情を、整理して語ってくださった。また、そうした多岐にわたる活動から共通して導き出される「『文化』のガバナンスはどこにあるのか」という大きな問いを、行政のトップから現場の学芸員等に至る人事問題に収斂させる形で、明快に提起された。引き続きの議論では、有意義な人材活用を難しくしている背景として指定管理者制度が俎上に乗ったが、キャリア観への影響などを含め、今日の日本社会にまさに広い意味での文化の変容をもたらした主要因の一として、小泉改革の落とし子たる指定管理者制度を掘り下げ直してみることは、現代史の考察として有意義かつ必要なことであろう。その変容とは、効率性とは異なる人間の「思い」や、専門性に裏づけられた価値観、それらに基づくさまざまな行動……ひいては人間社会の「非実質化」と総称することができるのではないかというのが、討論中に頭に浮かんだ考えである。

お二人目の鈴木佳子さんは、まったく個人的に三味線のお稽古を続けてこられるなかで直面された、邦楽器存続の道を危うくする厳しい現実について、基礎的な情報提供に加え、アカデミックな調査の結果とジャーナリストのような鋭さ、そしてご自身の深い「思い」を交えてお話しくださった。学校での音楽教育に邦楽器が取り込まれるなど、子どもたちを日本の伝統音楽になじませる方策は以前より進展してきている。そうした面のさらなる充実についても、討論時間には多々の意見が交わされたが、鈴木さんのご報告は、現実には邦楽器の消滅を回避するために、そのようないわば音楽のアウトプットの面における、あえて言えば「生易しい」努力だけでは到底追いつかない現実を突きつけるものであった。

演奏者のみならず、楽器製作のあらゆる側面にかかわる担い手の生活が成り立たなければ、その生業は続いていかない。これが生々しい経済または民生の問題に踏み込むトピックであることは言うまでもないが、のみならず、伝統楽器の素材が動物の皮や骨、また今日では入手が容易ではない木材等を含むことから、現代における輸出入品目の規制や動物愛護観念の発達、さらには歴史的な人権問題とも深く絡み合っている。各側面に関する監督官庁の縦割りが問題の検討を難しくしていることも指摘されたが、それだけではなく、多くの人がそれぞれに譲れない価値観を持ったいくつもの問題がぶつかり合う交点に、邦楽器の現在があるということ、衝撃をもって学んだ。勇気をもって重要な論題を提起してくださった鈴木さんに、心から御礼を申し上げたい。

一般申し込みで今回の勉強会に参加されたのは、自治体や公立文化施設に勤務される方や、ご自身が芸術家でいらっしゃる方、またその分野も日本の伝統芸術から洋楽まで多岐にわたる9人の皆さま（定員10名で締め切ったが、残念ながら1名ご欠席）であった。本当に活発にご発言くださり、夜間の3時間という長丁場が文字どおりあっという間に過ぎてしまった。メンバーも含めてZoomの「ギャラリーモード」一画面にぎりぎりお顔の映る範囲であり、やはりこれ以上の人数をお誘いするのは難しいため、次回以降も「定員10名、先着順」とせざるをえないが、これからの過程で、引き続きぜひ多くの方々に参画していただき、議論を積み重ねていきたい。

全員のご協力で、新バージョン1回目の勉強会を成功裏に終わられたことを感謝いたします。

（文責・佐野真由子）